



リスクは皆で負う イスラエルの団結と決断

—ギラッド・シャリート兵士一人と超凶悪なテロリスト 1027 人の交換—

2006 年から5年4ヶ月にわたってガザのハマスに拉致されていたイスラエル兵、ギラッド・シャリート兵士（24 才（拉致当時 19 才））が10月18日、イスラエルに生還した。交換に解放されるのはイスラエルの市民を虐殺した凶悪なテロリストたち 1027 人。これが将来のイスラエルの治安に大きな影を落とすことは避けられない。想像を超えるリスクと痛みを負って一人の同胞を助けたイスラエルの団結と決断をレポートする。

国民の 80%がテレビを見た日

その日、イスラエルではだれもがテレビに釘付けになった。拉致から5年もたっている。ギラッド・シャリート兵士は本当に生きて帰ってくるのか……。朝8時11分、第一段階で解放されるテロリストを乗せたバスが刑務所から移動を始めた。8時38分、ガザでハマスが、仲介者のエジプトにシャリート兵士を引き渡し完了—生存の確認はまだない—9時13分、イスラエル関係者がシャリート兵士の生存を確認したとのニュースが入った。エジプトのメディアがシャリート兵士の最初の映像を流してくる。9時17分、エジプトのテレビ局が、無神経にも解放直後のシャリート兵士への独占直接インタビューを行った。予定にない動きだ！後にイスラエルはこのエジプトのテレビ局に激しく抗議している。

ずっと屋内にいたためか、シャリート兵士はやせて顔は青白く、返答にも時間がかかる。「長い間、だれにも会わなかった。だれかと話がしたかった。」「……家族に会いたかった。」インタビューアーが訪ねる。「あなたは解放された。イスラエルに捕まっているパレスチナ人も全員解放されるべきと思わないか」彼は答えた。「……………彼らも解放されたいと思う。イスラエルへの戦いをやめるならば。」

この後、シャリート兵士はシナイ半島を経由してイスラエル軍へ完全に引き渡された。テレビに写る彼の顔に、



少し落ち着きと顔色が戻る。幸い、懸念されていたような心身への拷問は行われていなかったようだ。簡単な医療チェックでは異常なしと診断された。イスラエルの軍服に着替えて、テル・ノフ空軍基地へ。ネタニヤフ首相、バラク国防相、ガンツ参謀総長に迎えられ、シャリート兵士は、5年4ヶ月ぶりに両親との再会を果たした。

拉致

シャリート兵士（当時 19 才）が拉致されたのは2006 年6月。ちょうど第二次レバノン戦争が始まる直前だった。彼はガザとイスラエルの国境付近で見張りをする戦車の中にいた。この時、テロリストは、ガザから掘られた小さな地下トンネルを通してイスラエル領内へ侵入、シャリート兵士たちの戦車に背後からいきなり対戦車砲を砲撃した。戦車は火を噴いて走行不能に陥った。最初に脱出した2人のイスラエル兵はその場で撃たれて死亡。交戦状態の中、テロリスト2人が死亡、イスラエル兵3人も重傷を負った。シャリート兵士は負傷した状態で拉致され、消息を絶った。

市民による解放運動

シャリート兵士を拘束していたのはガザのハマスだった。イスラエル政府は直ちに返還を求めて交渉を始めた。

国連は何もしなかった。アメリカも、テロ組織との接触を禁じるという法律があるため、ハマスとの交渉をとりもつことはできなかった。エジプトやドイツが仲介に立った。この5年の間に、「シャリート兵士いよいよ解放か」というニュースが何度も流れた。しかしそのたびに交渉は直前で決裂に終わり、家族支援者に深い絶望感を与え続けた。決裂の原因の一つはマルワン・バルグーティの解放だ。歴代のテロを指導してきた大物バルグーティを放つことは、イスラエル全体を危険に陥れることになる。ネタニヤフ首相は「シャリート兵士を取り戻したい。しかし、私は全イスラエルの治安も考えなければならない」と苦渋の胸中を訴え続けた。

しかし、シャリート兵士の両親、また市民たちはあきらめなかった。シャリート兵士は志願して兵士になったのではない。国民すべてが義務として徴兵される一般徴兵だ。もしかしたら自分の息子だったかもしれない……。シャリート兵士の拉致はだれにとっても単なる人ごとではなかった。両親とその支援者たちは、首相官邸前にテントを張って、息子の返還を訴え続けた。全国から、支援者が集まり、5年たってもその数は減らなかった。



今回のシャリート兵士奪回は単にネタニヤフ首相個人の決断ではないと言われていた。これはイスラエル市民

が、団結して勝ち取った勝利なのである。

遺族たちとネタニヤフ首相の苦悩

しかし、これが単なる勝利であると言うことはできない。シャリート兵士一人と引き替えに放たれたテロリストの名簿をみれば、イスラエルの国民がいかに大きなリスクを負ったかがわかる。確かにバルグーティの名はなかった。しかし放たれたテロリストのうち、100人以上が複数回の終身刑を受けているほどの極悪犯だった。

たとえば、2002年にネタニヤフのホテルで過ぎ越しの祭りを祝っていたユダヤ人に対する爆弾テロで30人を殺害した犯人、ラマラでイスラエル兵2名をリンチ殺害した犯人二人、10代の少年を西岸地区に引き込んで殺害した者などである。終身刑一回の者も含めると、この日解放された477人のうち、実に300人はイスラ

エル人殺害に関係し、終身刑で服役していた者だった。今後、残りの550人が2ヶ月以内に釈放され、計1027人が「恩赦」になる約束になっている。テロリスト1027人の釈放は、彼らに家族を殺され、今もその痛みを背負う遺族にとっては、傷を再びえぐりかえされるような耐え難い痛みと苦しみを意味した。

イスラエルは民主主義、法治国家である。解放されるテロリストの名簿を一般公開の後、不服のある者は48時間以内



に訴えるようにとの機会が設けられた。訴えたのはわずか4組だった。世論調査では、国民の78%がネタニヤフ首相に賛同し、リスクと痛みを負ってもシャリート兵士の解放を望んでいた。ネタニヤフ首相は、遺族たちに対し手紙を書いた。「シャリート兵士を取り戻すために、今回ほどの条件は二度と来ないだろう。今取り戻さなければ彼の命が失われるかもしれない。痛みはわかるがなんとか理解してほしい。」4組の訴えはすべて却下され、48時間後、囚人交換は決行されたのである。

イスラエル国民が払う解放のつけ

シャリート兵士の帰還を国民全部が歓喜したように、この日、パレスチナ側でも大きな喜びの日となった。ガザでは、解放された者たちを数十万の群衆が歓喜を持って迎えた。パレスチナ人たちが今、声を一つにして叫んでいることがある。新たにイスラエル兵を拉致して、残り6000人の囚人もイスラエルから救い出そうということだ。今後、イスラエル兵拉致の他、放たれた1027人の凶悪犯がイスラエルに対し、新たなテロ活動を再開するおそれもある。これがシャリート兵士返還との引き替えにイスラエルの国民が全員で支払うつけである。

ユダヤ人の団結力

たった一人のユダヤ人青年のために、国民全員のリスクを覚悟で1027人も極悪犯を釈放する国。こんな国は世界中どこにもないだろう。一人を助けて皆がリスクを負うのか、皆が助かるためには一人を犠牲にするのか。こうした場合、おそらく日本も含め多くの国々が後者の選択をするであろう。しかし、ユダヤ人は違う。個人的には知らない青年であっても、同胞ユダヤ人の危機は自分の危機である。移民国家イスラエル。いかに多様化がすすんでいたとしても、いざとなれば一致する。底知れない彼らの団結力を見せつけられた事件だった。